

とはできたと思う。最後に、滞在中非常にお世話になった一方位さんには心から感謝の意を表した

い。

(7月11～14日 内藤教育指導)

菅平 巡 検

山 下 和 歌 子

前期の気候学の試験終了後に説明会、事前準備が始まった今回の巡検。予定表の「5日4時より8時まで」という早期観測の時間に驚き、秋休みの真ん中に行われることと相まって、出発前気が重かった者は少なくなかったはずである。目的地到着後は観測に明け暮れることになるので、皆の関心は専ら車中での駅弁に集中していた。

このようなスタートをきった菅平巡検の目的は微気候観測であった。4日の午後、現地集合した我々は、筑波大学菅平実験センターでの今後の観測の御指導、お世話をして下さる山下先生に荷物を預け、田宮教官と共に日本ダボスへ向かった。小高い丘といった日本ダボスの上から、宿泊地となる実験センターや、明日の観測地、周辺の地形を地図を片手に大まかに頭に入れた。山を下り、いよいよ明日の観測地の下見を行った。観測地は、南北を実験センター、日本ダボス、東西を菅平学園付近、唐沢、に囲まれた11ヶ所である。この時点ではまだ班分けがされておらず、各自この観測地の担当になるかわからないので、各地点の特徴をのみこもうと努力していた。実験所の内部、といった距離的に恵まれた地点から、菅平学園のグラウンドの端、実験所からかなり遠い足場の悪そうな地点、といったように観測地は広範囲の様々な条件に渡るものであった。

食後のミーティングで班分け、観測地の分担が行われ、各班毎に測器の準備にかかった。アスマン通風乾湿計、風向・風速計の使い方、設置方法測定上の諸注意を受けた。特に乾湿計は人の息のかからない所に固定される必要があるので、山下先生考案の二本の竿を立て、ぶら下げることになった。机上での事前学習後、戸外で実際器具を設置、検定し、全員明日の朝に備え早々と床についた。出発前に霜の降る可能性を知らされていたとはいえ、皆、早朝の寒さが気がかりであった。

予定の4時を4時半に変更したとはいえ、早起

きは慣れない者には辛かった。真暗闇を懐中電灯の明かりだけを頼りに、各班毎に観測地へ向かった。私達の班は、観測地点を間違えた上、4時30分の第一回観測時に間に合わず、5分遅れのスタートになるという、ハプニングを一手に引き受けてしまった。4時30分から8時までの5分毎の、長い観測が始まった。前日、全員時計合わせをしたとはいえ、人の手による観測には測定時間に数秒の違いはでてくるものである。この観測の前提として、夜間冷やされた空気が山を下り、冷気湖を作る、ということがあった。このようなことを観測結果から証明するためには、いったいどれ程までの誤差が許されるのだろうか。しかし、正直なところ観測地を間違えたことすら、先生が見回りで来て下さらなければ気づかなかったであろう我々である。観測中は数秒の誤差どころではなく、ただ寒さに耐えるのに必死であった。7時25分時点でやっと太陽が現れ、他の班の人を確認することができた。それまでは、天気の設定も暗がり故、月の出方を頼るしかなかった。8時の最終測定終了時は、暖かい実験センターに帰れる喜び以外何も感じられなかった。

午後の観測12時から16時に出かける前に、器具の誤差検定がセンターの庭で行われた。午前とはちがいに太陽が姿を見せているとはいえ、長い観測を思い、足取り軽くとはいかなかった。各自弁当を持ち、器具を手に、今回は場所を間違え班も、器具設置に手間取る班もなく順調なスタートをきった。しかし、当初の太陽はほどなく姿を消し、強風の吹きさらす観測地では午前以上に寒さとの闘いが強いられた。通りがかりの人に「何ができるんですか」と勘違いされたことにもめげず、黙々と観測を続けたが、予定の16時を待たずして3時10分に雨に見舞われた。観測を諦めた我々は器具を手に、指定の避難所に駆け込んだ。

夜の結果報告を中止し明日に延期となり、先生

の心配りのもと、冷えた体を休めることになった。
この観測結果がどれ程の意味を持つのか、どこまでが信用可能か、考えだすときりがないように思う。しかし、厳寒の中での気候観測という、生

涯一度であろう経験は貴重であると同時に、級友のいろいろな面が見れ意義深かったと思う。

(10月4～6日 田宮教官指導)

富士北麓巡検

大小田 恵子

10月2日・3日と1泊2日で行われた富士北麓巡検は、私達1年生にとっては初めての巡検であり、期待7割、不安3割という心境だった。何しろ地形学やら何やらの知識を全くといって良い程持ち合わせていない未熟者達で、2日間の内容を消化し切れるかどうかとも不安な有様である。それでも、プリントに記されていた「巡検のポイント」が「フィールドワークの練習」だったのと、先輩の話を自分に都合良く解釈していたのとで、「とにかく行って、歩けばどうにかなる」という程度の認識で出かけたのだった。

そんな様子だったから、宿舎に着いてすぐに歩き始め、最初に驚いたのは、浅海先生の「健脚」ぶりだった。道端の岩石やルートについて、時々足を止め、説明をされながらであったが、とにかく速い。まごまごしている私達を尻目にさっさと次のポイントへ向かってしまう先生を、負けてはならじとメモを片手にだだだど走って追いながら、音に聞こえた浅海先生の「健脚」とはこのことかと思いきや、これは思いのほかキツイ巡検になるかもしれないとため息をついたのだった。

私達が歩いている道のそこそこには、溶岩が固まったものだという黒っぽい岩石があった。知らずに見ればただの岩だが、これが「富士山のケセラ」だと言われると、何となく不思議な気がしてしまう。また、時々小さな畑に野菜が植えてあったりする。富士北麓にもやはり耕作地は希少だそうだが、こんなところに畑があることが、火山の麓という作物の育ちの悪いやせた土を想像してしまう私には意外だった。

1日目は思わぬハプニングで予定が狂ってしまい、西湖民宿村や元根場部落跡に行けなかったのが残念だが、そのかわり樹海遊歩道をゆっくり歩きながら、木の根元に不自然にぽかっと口を開い

た洞穴や、溶岩樹型を見ることができた。溶岩樹型は、溶岩が倒木を覆って固まった後木が腐ってなくなり、木の形だけ残ったものということだ。セミナーの夜にスライドで見たような、年輪まで分かるものを私は期待していたのだが、そこまではさすがに無理だった。

2日目は宿舎をバスで出発し、まず白糸の滝へ向かった。お天気のせいもあってか水が青く、それが滝つぼの深さを物語り、恐ろしい程の美しさだった。ここは、風化のため粘土化した古い泥流の上に隙間の多い新しい溶岩流がのっているの、両者の間から地下水が湧き出し、滝を作っているそうだが、何の作為もなく、成りゆきだけでこんな美しい景観ができてしまうことに感心した。

次の畜産試験場では、牛の写真がずらりと飾られた部屋で係の人のお話を聞いてから、施設を見せて頂いた。ここでは主に牛の飼育に関して、特に飼料の種類、与え方や品種改良について研究し、実験等を行うそうで、成程敷地内には沢山の牛が飼われていて、ぞろぞろ歩いて行くよそ者達を、気のせいかもしれないと珍しそうに見ていたようだ。

またしても時間がなくなり、鱒の養殖場をゆっくり見学できなかったのが残念だったが、この日の昼食は浅海先生のお薦めの鱒料理屋さんでとった。こういう時は皆疲れを忘れて歓声をあげる。手塩にかけて(?)育てた鱒を料理するのに抵抗はないのだろうか、と馬鹿なことを考えた私も、一瞬後には忘れて元気に食べてしまったのだった。

結局、全体を通して遠足気分が抜け切れず、浅海先生も手を焼かれたことだろうが、私にとっての今回の巡検の成果は、富士山を火山として認識するようになったことだ。今まで、富士山の活動に関する文章を読んでも実感はなかった。しかし、麓を蟻のようにはい回っただけとはいえ、自